

# 七校便り

宮城県白石高等学校七ヶ宿校

No. 53

平成26年 3月 1日

## 卒業特集号

平成25年度卒業生の3年間を、振り返りたいと思います。

入学は平成23年でした。東日本大震災が甚大な被害をもたらした年です。

入学試験は3月9日でした。この日にも、震度4の地震があり、学力検査が一時中断されました。

そして3月11日午後2時46分、マグニチュード9.0という観測史上例を見ない巨大地震が発生しました。石巻や気仙沼は津波によって未曾有の被害を受けましたが、七ヶ宿校は盤石の地盤の上に建てられているため、大きな被害はありませんでした。

そして、大変な混乱の中、入学式が行われたのは、4月21日のことでした。



この年、1年生の男子によりバスケット部が結成されました。



また文化祭に向けて、二人だけのバンドが結成されました。二人とも楽器に触れるのは初めてでしたが、必死に練習を重ね、何とか演奏にこぎつけました。



二人はその後も練習を続け、演奏技術が上達し、メンバーも増え、文化祭や町の音楽祭などで、数々の伝説を残しました。



2年生の時には、『ねりんぴっく』のグラウンドゴルフ大会が行われ、七校も運営に協力しました。子どもたちに大人気の『源流ポーション』の中に入っているのは、高野君です。



修学旅行は、<sup>うよきとくせつ</sup>紆余曲折の末、広島・長崎・神戸・大阪という、少人数ならではの手作り旅行となりました。



そして3年生では、努力の結実が、たくさんありました。

高野君、八巻君、山家君は、2年生に引き続き、陸上の全国大会(8月、東京代々木国立競技場)に出場しました。山家君は、砲丸投げで8位、円盤投げで5位という、輝かしい成果を残しました。



10月に行われた、生活体験発表宮城県大会では、後藤さんが本校代表として出場し、『無と苦の先』と題する発表で、読売新聞社賞(第2位相当)を受賞しました。



東日本大震災に始まり、翌年の1月には大雪のため旧校舎の玄関がこわれ、3月には爆弾低気圧による暴風で、通学路の松がなぎ倒されました。遠足や強歩大会も、雨のために予定通りに実施することができませんでした。それらもすべて、思い出になろうとしています。いつまでも、七校のことを忘れないでください。卒業おめでとうございます。

### 《余白》副校長 さよならだけが人生だ

名訳と呼ばれるものは、たくさんあります。二葉亭四迷という人が、『I love you.』を『死んでもいいわ』と訳したものなどが有名ですが、『勧酒(酒をすすむ)』という漢詩の日本語訳が、私は取り分け好きです。元の漢詩は次のようなものです。直訳は国語の先生に聞いてみてください。

君に<sup>きみ</sup>勧<sup>すす</sup>む 金<sup>きん</sup>屈<sup>くつ</sup>卮<sup>し</sup>(黄金の杯)  
満<sup>まん</sup>酌<sup>しやく</sup> 辞<sup>じ</sup>するを 須<sup>もち</sup>いず  
花<sup>はな</sup>発<sup>ひら</sup>けば 風<sup>ふう</sup>雨<sup>う</sup> 多<sup>お</sup>し  
人<sup>じん</sup>生<sup>せい</sup> 別<sup>べつ</sup>離<sup>り</sup> 足<sup>た</sup>る

これを、小説家の井伏鱒二は次のように翻訳しました。

この<sup>さかずき</sup>杯<sup>さかずき</sup>を受けてくれ  
どうぞ なみなみ つがしておくれ  
花に嵐の たとえもあるぞ  
さよならだけが 人生だ

この詩の意味は、『人生に別れは付きものだから、今一緒にいる、この瞬間を大切にしなければならぬ』ということでしょうか。

日本には『無常』や『一期一会』という言葉がありますが、それらと通じます。

今日、卒業する皆さんも、何かの縁で、3年間同じ教室で過ごし、苦楽をともにしてきたわけです。その時間は、皆さんにとって、とても大切なものであったはずです。

人生は、うつろいやすいからこそ愛おしいのだと、私は思っています。